

ヨハネ13：1-30「謙虚さの肖像」

13:1 さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。13:2 夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、13:3 イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、13:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。13:5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。13:6 こうして、イエスはシモン・ペテロのところに來られた。ペテロはイエスに言った。「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」13:7 イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」13:8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにしないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」13:9 シモン・ペテロは言った。「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」13:10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」13:11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」と言われたのである。13:12 イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。13:13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいません。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。13:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。13:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。13:17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。13:18 わたしは、あなたがた全部の者について言っているわけではありません。わたしは、わたしが選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。13:19 わたしは、そのことが起こる前に、今あなたがたに話しておきます。そのことが起こったときに、わたしがその人であることをあなたがたが信じるためです。13:20 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。」13:21 イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」13:22 弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。13:23 弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。13:24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」13:25 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」13:26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。13:27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」13:28 席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。13:29 ユダが金入れを持っていたので、イエスが彼に、「祭りのために入用の物を買え」と言われたのだとか、または、貧しい人々に何か施しをするように言われたのだとか思った者も中にはいた。13:30 ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。

導入

13 : 1-30は、ヨハネの福音書の中でも重要な部分です。イエスはご自身がいなくなったときのために弟子たちを備えさせようとなさいます。イエスは、弟子たちが決して忘れない行動をなさいました。この行為にはふたつの目的がありましたが、それは後ほど見ていきます。

この個所で、イエスはご自身を裏切る者が誰かを明かされます。聖書には、その理由がいくつか記されています。

この章は、私たちに課題を投げかける個所です。イエスの「十字架」の意味や、正真正銘の弟子となってイエスに従うことに伴う犠牲について教えてください。またこの章は、イエスを取り巻く状況を支配しているのはイエスご自身であり、サタンやユダではないと教えます。

今日は、きよめについて主に学びたいので、旧約聖書のきよめの概念を知っておくとよいでしょう。

「きよい」という概念は、旧約聖書によく登場します。レビ記16 : 29-34を読みましょう。

16:29 以下のことはあなたがたに、永遠のおきてとなる。第七の月の十日には、あなたがたは身を戒めなければならない。この国に生まれた者も、あなたがたの中の在留異国人も、どんな仕事もしてはならない。 16:30 なぜなら、この日に、あなたがたをきよめるために、あなたがたの贖いとなされるからである。あなたがたは、【主】の前でそのすべての罪からきよめられるのである。 16:31 これがあなたがたの全き休みの安息であり、あなたがたは身を戒める。これは永遠のおきてである。 16:32 油をそそがれ、その父に代わって祭司として仕えるために任命された祭司が、贖いをする。彼は亜麻布の装束、すなわち聖なる装束を着ける。 16:33 彼は至聖所の贖いをする。また会見の天幕と祭壇の贖いを行わなければならない。また彼は祭司たちと集会のすべての人々の贖いを行わなければならない。 16:34 以上のことは、あなたがたに永遠のおきてとなる。これは年に一度、イスラエル人のすべての罪から彼らを贖うためである。」モーセは【主】が命じられたとおりに行った。

この個所は、贖罪の日についての記述です。これは年に一度、動物の血によって民の罪がきよめられる日です。

レビ記17 : 11は次のように語ります。「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」

では、詩篇51 : 1-7を読みましょう。

51:1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。 51:2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。 51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。 51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。 51:5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。 51:6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。 51:7 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。

ダビデは姦淫の罪を犯しました。悔い改めて神に赦しを請うなら、神が洗ってくださり、雪よりも白くなると、ダビデは知っていました。

そうすれば、罪からきよめられます。

雪は真っ白です。神の御目に完全にきよめられる様を連想させます。

この旧約聖書の背景を念頭に、13章をひも解いていきたいと思います。

今日は13章を大きくふたつに分けてお話しします。

1. 1-17節：信徒の人生における十字架のたとえ
2. 18-30節：イエスが裏切り者を明かされる

1. 信徒の人生における十字架のたとえ (1-17節)

イエスが弟子たちの足を洗われた出来事は、イエスの死を踏まえて解釈する必要があります。

これには3つの理由があります。

まず、1-3節で、イエスのご自身の死が近づいたとおっしゃいます。

次に、イエスは、あらゆる出来事の意味をご自身は理解しているが弟子たちは理解していないとおっしゃいます。7、12、28節をご覧ください。これらの箇所は、イエスのなされたことを弟子たちは理解していなかったとはっきり語ります。一方、1、3、11節で、イエスは何が起こっているのかちゃんとわかっているとおっしゃいます。

さらに、イエスが十字架にかけられるまであと一日です。そんなときに目に見えるたとえを無駄にお使いにはなりません。もうすぐ起ころうとしているできごとについて教えるために、たとえをお使いになりました。

ですから、イエスが弟子たちの足を洗われた出来事は、イエスの十字架上の死と関わりがあると言えます。

足を洗う仕事は、しもべに与える役割の中でもっとも卑しい仕事です。裕福なユダヤ人に多くの奴隷がいた場合、ユダヤ人の奴隷に足を洗う役をさせることは決してありません。その役割は必ず異邦人の奴隷に与えます。

道には家畜や動物がたくさんおり、履物を履いていたとしても、当時の履物はサンダルのようなものですから、足はたいへん汚れます。動物の糞が足についている場合もあります。ですから、6節で、イエスに足を洗ってもらうことにペテロが恐縮したのも当然です。

イエスとペテロの会話から、「洗足」の意味を知ることができます。

ペテロがイエスに足を洗っていただくのを断ると、イエスは、「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」とおっしゃいました。

イエスはここで、わかりやすいたとえを使って重要な神学をペテロに伝えておられます。

イエスの血潮で洗われなければ、私たちはイエスと無関係の者となります。「関係」と訳されたギリシャ語の単語「メロス」は、遺産分与の際などに使われました。

遺産は誰かが死亡した際に手にします。ここでイエスがおっしゃったのは、こういうことです。わたしはもうすぐ死にます。そして、遺産があなたに渡ります。しかし、わたしがあなたのために十字架上で流す血によって洗いきよめられなければ、その遺産は受け取れません。

ペテロは、イエスのおっしゃっていることがわかりませんでした。けれども、イエスとともにいたいということはわかっていました。そこで、もしそういうことなら手も頭も全身を洗っていただきたいと返答しました(9節)。

10節のイエスの答えは、考えさせられるものです。私たちはこれをしっかり理解する必要があります。

5、6、8、12、14節で「洗う」と訳されたギリシャ語の単語は「ニプト」です。これは、「体の一部」を洗うという意味です。一方、10節で「水浴」と訳されたギリシャ語は「ルーオ」で、「全身浴」を意味します。この違いが大切です。イエスは、弟子たちに「きよい歩み」の大切さを教えようとしておられたのです。

ここでイエスがおっしゃっていること

聖なる神の前に、人が自らの罪に気づき、悔い改め、イエスに赦しを請うと、罪は取り去られて赦されます。これは全身浴のようなものです。完全なきよめです。

しかし、クリスチャンとしてこの世で生きていくと、簡単に罪に汚されてしまいます。

そうなっても最初からもう一度やりなおすする必要はありません。ただ、その罪をきよめていただく必要はあります。

ヨハネ第一1:9にはこうあります。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

もうお風呂に入ったなら、どうして足をきれいにしておくのが大切なのでしょうか。

足をきれいにしておかなければイエスと親しい交わりを持ってないからです。そのことはすでに13章8節で説明されています。

「関係」と訳されたギリシャ語「メロス」のひとつの側面は、遺産に関わるものでした。この単語には、「何かを分ける」という意味もあります。

神が私たちを「お風呂」に入れて全身浴をさせると、キリストと「ひとつ」にならせてくださいます。

これは、変わる事のない確固たる関係です。10節の「水浴」という単語は完了形です。つまり、一度だけなされてその件は落ち着いたという意味です。

しかし、イエスとの「交わり」には、日々の親しい関係が重要です。

罪を告白しないまましていると、イエスとの歩みの妨げとなります。そういうときに足を洗われる必要があるのです。定期的に霊の健康診断をするのがよいのはこういうわけです。とくに、月一度の聖餐式に与る前にあてはまります。

旧約聖書の祭司がこの基本的真理を描きます。旧約聖書の祭司は、聖別される際に全身を洗いました（出エジプト29:4）。これは二度と繰り返すことはありません。しかし、日々仕えるときに汚れるので、外庭にある青銅の洗盤で手足を洗わなければなりません（出エジプト30:18-21）。

そうして初めて、聖所に入り、燭台のともしびを灯し、聖なるパンを食べ、香をたくことができます。

イエスがおっしゃったのは、全身浴は一度でよいが、足を洗う行為は頻繁にする必要があるかもしれないということです。

私たちは、イエスの十字架の上の御業を信じて、イエス・キリストとひとつにされました。しかし、イエスとの交わりが、罪の汚れに阻害されることもあります。

罪を犯してしまったら、その罪をイエスに告白し、ヨハネ第一1:9のとおりきよめてくださるとイエスを信頼しましょう。

大切なのは、イエスの前で正直になることです。イエスはすべてをご存じなのですから。

ヨハネは、ペテロとイエスの関係とユダとイエスの関係が異なるものだったことを指摘します。

イエスはユダの足も洗われましたが、それは役に立ちませんでした。ユダは全身浴がまだだったからです。

ヨハネは6：64-71で、ユダが一度も本当の信徒になっていなかったことを明らかにします。つまり全身浴を一度もしていないということです。

では12-17節に進みましょう。

17節でイエスは、「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それをを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」とおっしゃいました。

ここでイエスは何を言おうとしておられたのでしょうか。

イエスはここで、十字架からクリスチャンの奉仕へと話題を変えておられます。

イエスがここでおっしゃったのは、弟子の足を洗う行為は、イエスの弟子全員が祝福を受けるために模範とするべきだということです。

イエスの模範に謙虚に従うことが弟子の特徴であるべきです。

イエスは、人に仕えるためにへりくだられました。

15-16節で、弟子であることは第一に「しもべ」であることだとイエスははっきり教えておられます。イエスについていきながら仕えるのを全面的に拒否するのは、イエスの思いに反します。

17節で「祝福される」と訳された言葉は「神にとっても恵まれる」という意味です。イエスを信じる「信仰」は、従順な行いが伴ってこそ本物と見なされる、とイエスはおっしゃいます。行いは、「福音」をその人が理解した証拠となります。

イエスは常に、「神学」と「行い」をセットにされます。ここでは、「十字架」と「奉仕」が関連付けられています。

アメリカで非常に大きな教会を牧会するリック・ウォレン牧師は、「座って浸り不機嫌の働き」を痛烈に批判します。どんな働きでしょう。毎週教会に来てみことばに浸り、牧師の心配りを存分に受けて浸りますが、教会の奉仕には一切かわりません。そしていつのまにか不機嫌になって、イエスに仕える人たちを批判し始めるのです。

このような人は、水を入れるけれども排水しないプールのようなものです。水が入ってくるだけだとプールはどんな状態になるでしょう。水がよどんでしまいます。

水がよどんだプールはどうなりますか。蚊が発生します。そうなるのととてもやっかいです。

神の祝福を受けたいなら、OICで何か奉仕できる場所を見つけましょう。私はいつも教会員の皆さんに、ふたつの働きに関わるべきだと言うようにしています。

1. 教会がうまく機能するためにしなければならないこと。例えば、聖餐式の配布係、日曜学校、パワーポイントの操作、音響などです。したくなくてもする必要のある内容です。
2. 次に、ふたつめは神に与えていただいた賜物や才能を用いられる奉仕です。たましいを養い、心に祝福を得られる奉仕となっていくものです。例えば、賛美の奉仕、日曜学校教師、伝道師、牧会ケアなどが挙げられます。

OICでまったく奉仕をしていないなら、「座って浸り不機嫌の働き」に加わらないよう気をつけましょう。そこに祝福はまったくありません。周囲の人の心を痛めるだけです。

今日、OICでのふたつの奉仕を祈って考え、信仰を本物にしようと思いませんか。日曜学校をはじめ、奉仕者を募集している働きはたくさんあります。

ヤコブ1：22-27は、「みことばを行う」ことで祝福がやってくると明言します。

1:22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。 1:23 みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。 1:24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなようであったかを忘れてしまいます。 1:25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。 1:26 自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。 1:27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。

では、今日の個所の後半に進みます。18-30節です。

イエスを殺す企てが進められ、イエスを裏切る者が明かされます。聖書は、イエスが一連の状況を支配しておられたと断言します。注目すべきなのは19節です。

神のご計画をお持ちで、イエスはそのご計画をご存知でした。神のご計画は、罪深い人類を罪の罰から救うことでした。罪の罰とは、永遠に神から引き離されるというものでした。誰かがイエスを裏切らなければならなかったのです。イエスの身近にいて、イエスを信じていない人でなければなりません。選ばれたのはユダでした。彼は、イエスや弟子たちの身の回りの必要をまかなう共同資金からお金を盗むどろぼうでした。

ユダが本物の信徒でなかったことを覚えておくことが大切です。彼は偽善者でした。

ユダは一度もイエスを信じたことがありませんでした（6：64-71）。

全身浴を受けたことがありませんでした（13：10-11）。

御父が御子に与えられた、選ばれた人たちのひとりではありませんでした（13：18、17：12）。

このとき、イエスの関心事はふたつありました。まず、神のみことばを成就すること、次に、「神に栄光を帰す」ことです（18節）。

ここでイエスは詩篇41：9を引用なさいます。ダビデがこの詩篇を書いた時、おそらく相談役アヒトフェルのことを書いたのでしょう。アヒトフェルはダビデを裏切り、アブシャロムの謀反に加担しました。

イエスは、これと似た状況に追い込まれました。親切の限りを尽くした相手が裏切ろうとしているのです。

イエスは、ユダの行動が弟子たちの信仰を弱らせることを心配しました。そこで、この出来事を神のみことばに関連付けられました。後に弟子たちが神のみことばが成就するのを見たなら、彼らの信仰は弱らずに強められるはずだからです。

ヨハネ6：64で、イエスはすでに裏切り者が誰かご存じだと明かしておられます。

ユダは、他の弟子たちとまったく同じ霊的な特権に与っていたにもかかわらず、心をかたくなにする道を選びました。

氷を溶かす太陽は、粘土を固まらせる太陽でもあった人がいます。

その日ユダは、固まる粘土になってしまいました。

(ユダとアヒトフェルは、ふたりとも自殺しました。)

ユダはその場を離れ、夜の暗闇に消えていきました。

イエスは世の光です。誰でも光のもとに来るなら救われます。暗闇を選ぶこともできますが、その行きつくところは命ではなく死です。

適用

- a) 当時の弟子たちにとって、イエスがしもべの役割の中でももっとも卑しい仕事を引き受けて、弟子たちの足を洗われたことは、衝撃でした。しかしイエスが十字架にかかれた後、弟子たちはイエスの教えようとしておられたことを理解します。

ヨハネがこの出来事を紹介したことから、神の家族の一員になるための中心に十字架があることをヨハネが理解していたことがわかります。十字架は、信徒として生きていく上での中心でもあります。

この箇所は一貫して、イエスをご自身に属する人々を深く愛しておられたことを強調します。イエスに属する人々のために、イエスはまもなく死なれるのです。

- b) 現代の私たちにとっても、同じことが言えます。私たちはその場にいませんでした。ただこの話を読んで知っているだけです。それでも、弟子たちと同じような衝撃を受けるはずですが、私たちを愛するイエスの深い愛に圧倒されるはずですが、そうすれば、つまらない役割でもイエスのためなら喜んでできるようになるでしょう。イエスは仕えるために来られたこと、私たちは仕えることでイエスの模範に倣うことを忘れないでください。トイレ掃除でも、フェローシップの後片付けでも、イエスに仕えることを喜びとしましょう。あなたの奉仕は必ず報われます。